

「何、何も。」と拔作は口ごもる。「何も、別に……その……」

「まあ、いい、黙れ！」と、蠻カラ大將は叱りとばす。「ヤーコフ、さあ、やれ！」

ヤーコフは咽喉のところへ手をあてた。

「何を、兄弟、その……何を……ふむ、……何をやつたらいいんだか、ほんとに、分かんねえけんど……」

「まあ、いい、びくびくするな。みつともねえぞ！……何をまごまごすんだい？ お前の得意なのをやれ。」

蠻カラ大將は待ちかねてゐるかのやうに、うつむいた。

ヤーコフはしばらく黙つてゐたが、あたりを見廻して、片手で顔をかくした。人々の眼は一せいに彼の上を集まつた。わけても請負師は目を皿のやうにして見つめたが、その顔には例の自信ありげな勝ち誇つたやうな色のかげに、心ならずも湧いて来るかすかな不安が覗かれた。壁にもたれかかつて、再び両手を尻の下に敷いたけれど、もう脚を揺すぶつたりはしなかつた。遂にヤーコフは顔から手をとつたが、その色は死人のやうに蒼ざめて、眼は伏せた睫毛の奥にかすかに光つてゐた。彼は深い溜息をして、歌をうたひ出した……。初めの聲音は弱く一向に調子が乗らず、どうやら、胸の奥から出て来るのではなく、どこか遠いところから流れて来るもののやうに、

まるで思ひがけなくこの部屋へ飛び込んで来たらしく思はれた。この顫へかちな、よく透る聲音は、私たちに奇妙な感銘を與へた。私たちは互ひに顔を見合はせた。ニコライ・イワーヌイチの細君はすつかり居ずまひを正した。この最初の音につづく次の音は前よりはもつとしつかりしてゐて、息もよくつづいたが、強く指先で弾かれ、だしぬけに音を立てて、最後には、しばしの間、かすかに揺れてゐる絃のやうに、なほ明らかに慄へてゐた。第二の音につづいて第三の音、さうして哀愁を帯びた歌のしらべは、いよいよ熱を増し、幅を加へながら、降りかかつて来た。『野に通ふ道は一すぢならずして』と彼は歌つたが、私たちはみな心地よく、また苦しくもなつて来た。私は、白状するが、こんな聲をめつたに聞いたことがなかつた。それは稍々もつれ氣味で、うまなく響かないやうにも聞こえ、初めから何かしら病的な響があつた。しかも、そこには心からの深い情熱も、若々しさも、力も、甘さも、一種の魂をそそるやうな、あどけない哀愁も籠つてゐた。露西亞人の、眞實な、燃えるやうな魂がここに響き、ここに息づき、さうして人の胸をうち、露西亞人の心の絃に、ひたすらに沁みこんで行つたのだ。歌のしらべは高まり、歌のこゑはあふれる。ヤーコフはたしかに有頂天になつてゐた。今は、いささかも臆する色なく、身の幸福に酔つてゐた。聲はもう顫へなかつた。顫へを帯びてはゐたが、それは聴く者の魂を矢のやうに貫く情熱の、それとしても分かんぬひそかな顫へであつた。その聲は強く、しつかと幅をひろげる。私は思

ひおこす、嘗て私は日の暮れの引汐時に、遠く、おどろおどろしく、重々しげに波たちさわぐ海の砂濱に、一羽の大きな白い鷗を見たことがあつた。鷗は白絹のやうな胸に夕映えの紅の光を浴びて、身動きもせず、ただ時をり、なつかしい海に對ひ、沈みゆく眞紅の太陽に對つて、ゆつたりと大きな翼をひろげてゐた。私はヤーコフの歌を聴きながら、ゆくりなくあの鷗を思ひ出した。彼は全く競争相手をも、私たち一同をも忘れて歌つた。しかし、波に勢づけられる精悍な泳ぎ手のやうに、見受けたところ、彼は私たちの黙々として熱のこもつた共鳴に勵まされてゐるらしかつた。その聲の一つ一つの音には、さながら遠く涯しなくひろがる舊知の曠野が眼の前に湧きあがつて来るのを感じた。不意に私はかすかな咽び泣きの聲に驚かされた……。振り返つて見ると、店の女房が胸を窓におしあてて、泣いてゐるのであつた。ヤーコフはさつとその方に眼を向けて、前よりは一そう聲高く、聲うるはしく歌つた。ニコライ・イワーヌイチはうなだれ、パチクリは顔をそむけた。すつかりなごやかな氣持になつた抜作は馬鹿みたいに口をあけて立つてゐた。見すばらしい百姓は悲しさうに咳きながら、頭を振つて、隅の方でしくしく啜り泣きをしてゐた。蠻カラ大將の鐵のやうな顔には、すつかり釣りあがつた眉毛のかけから、ぼろぼろと大粒の涙が流れ落ちた。請負師は握りしめた拳を額にあてて身ぶごきもしなかつた……。若しヤ

ーコフが高い、非常に鋭い、まるで、その聲が張り裂けたかと思はれるやうな音を出して、俄かにはたと歌ひ納めをしなかつたら、一同の困憊は何によつて救はれるか分からなかつた。誰ひとり聲を立てるものもなく、身動きするものもなかつた。もつと歌ひはしないだらうかと、誰もが待ちうけてゐるらしかつた。けれども彼は私たち黙つてゐるのに驚いたらしく、眼をあけて、不思議さうに訊ねるやうな眼つきで一座を見渡し、やがて勝利は自分のものであることを覺つた……。

「ヤーシャ、」と彼の肩に手を置いて蠻カラ大將はいつたが、それきり二の句が續げなかつた。私たちは痺れてしまつたかのやうに佇つてゐた。請負師は靜かに立ちあがつて、ヤーコフのところへ近づいた。「おめえ……おめえが……おめえが勝つたんだ。」と、やつとのことदैいつて、あたふたと部屋の外へ出て行つた。

彼の素早い思ひ切つた遣り口に恍惚の世界が破られたかのやうに、急に誰もが騒がしく、歡ばしげに話し出した。抜作は跳びあがり、咳きながら、粉場が風車の翼を廻すやうに、手を振り廻し、パチクリは跋をひきながらヤーコフの方へ歩み寄つて接吻をしはじめた。ニコライ・イワーヌイチは立ちあがつて、嚴かに、自分もまた、麥酒を一本付け足さうと申し出た。蠻カラ大將は人よささうな笑ひを見せたが、私は彼の顔にこんな笑ひを見ようとは夢にも思はなかつた。見すば

らしい百姓は絶えず隅のところ、眼や、頬や、鼻や、唇を両方の袖で拭きながら、「ああ、うめえ、まあ、全く、誰が何て言つても、うめえ！」と繰り返してゐた。すつかり顔を赧くしてゐるニコライ・イワーヌイチの細君は、つと立ちあがつて向ふへ行つた。ヤーコフは子供のやうに自分の勝つたことを喜んでゐた。顔の容子は全く前とは打つて變つて、殊にその眼には幸福の色がかがやき出した。彼は賣り藁のところへ引つ張つて行かれた。泣いてゐる見すほらしい百姓を呼び呼せて、更に彼は請負師を呼びに店の小さい息子をやつた。けれど、その姿は見あたらない。た。やがて酒宴が始まつた。「お前、もう一つ聞かしてくれらうな、晩まで歌つてくれるだらう。」と拔作は手を高く上げながら、繰り返した。

私はもう一度ヤーコフを見て、この店を出た。私はとどまりたくはなかつた。折角の好い印象をけがすのを怖れたからである。しかし、暑さは依然として我慢しきれないほどであつた。暑さは、むらむらと重々しい層をなして地上にかかつてゐるかと思はれ、紺青の空には小さな明るい火のやうなものが、極めてこまかな、殆んど黒く見える埃の間を廻つてゆくかのやうに思はれた。あたりは、ひそまり返つてゐる。この疲れはた自然の深い静寂の中には、何かしら頼りない、押しつけられたやうなものがあつた。私は辛うじて乾草の小舎に辿りつき、刈つたばかりの、しかももう殆んど乾き切つてゐる草の上に寝ころんだ。永いこと、私は睡れなかつた。久しい間、

私の耳にはヤーコフの根強い聲が鳴り響いてゐた……。しかし、つひに、暑いのと疲れたのとで、私はいつとはなしに正體もなく寝込んでしまつた。眼をさました頃には、あたりはすつかり暗くなつてゐた。そこらに取り散らされた枯草は強い匂ひを放つて、かすかに濕りを帯びてゐた。半ば開いてゐる屋根の細い垂木の間には蒼白い星が力なく瞬いて見える。私は小舎を出た。夕映えの光はもう疾うに消えはてて、わづかに最後の名残が地平線のうへに白んでゐた。しかも、ついでさきほどまで赤熱されてゐた空気の中には涼しい夜風に吹かれても、なほ餘温あまのぬくもが感じられる。胸は今なほ冷氣をしきりに望んでゐる。風はなく、雲のかげもなく、空は見わたす限り清く澄んで、透きとほるやうに黒く、數しれぬ見えわかぬほどの星が、靜かにちらちらと輝いてゐる。村には小さなあかりが、ちらほら見える。ほど遠からぬ、明るい燈をともした居酒屋からは、がやがやと入り亂れた騒ぎが聞こえる。そのなかにどうやらヤーコフの聲らしいのを私は聞きわけた。時をり、どつと烈しい笑ひが聞こえて来る。私は小窓に歩み寄つて、硝子に顔をおしあてた。見ると、賑やかで、威勢はよかつたが、不愉快な光景であつた。誰も酔つてゐた。誰もが。ヤーコフを始めとして。ヤーコフは胸をむき出しにして、ベシチに腰を下ろし、嗶れ聲で、踊りの小唄みたいなものを歌ひながら、大儀さうにギターの絃をかき鳴らしてゐた。汗に濡れた髪は、おそろしく蒼ざめた顔のうへに、束をなして垂れさがつてゐる。酒場の眞ん中には、拔作

がすつかり『羽目をはづして』、上衣も脱ぎすて、灰色がかつた上衣を着た百姓の前に、ひよこひよこと踊つてゐた。百姓は百姓で、足踏みをしたり、ぐらつく足を擦り合はせたりして、蓬の髯の間に意味もなく微笑みを浮べながら、時をり片方の手を振つてゐた。「ええ、どうにもなれ！」とでもいひたさうに。その顔といつたら、こんなに御愛嬌なものも恐らく又とはあるまい。どんなに眉を釣り上げて、重い臉はあがらうとはしなかつた。臉はやつとわかるくらの、うす黄いろの、しかも胸の悪くなるやうな眼のうへに、しつかりとかふさつてゐるのである。通りがかりの人が彼の顔を一目みると、誰でも、「やあ、御機嫌だな、なかなか！」と必らず言ふに違ひないほど、彼は全く酔ひつづれて上機嫌な様子をしてゐた。パチクリは、蝦のやうに眞赤になつて、大きく鼻の孔をふくらまし、隅の方に毒々しく笑つてゐた。ひとりニコライ・イワーンヌイチはいかにも本當の居酒屋の主人らしく、相も變らぬ冷靜さを保つてゐた。部屋には新顔もたくさん集まつてはゐたが、蠻カラ大將はここには見えなかつた。

私は踵を返して、急ぎ足にコロトフカの村の在る丘を下りはじめた。この丘の麓には廣い平らな野原がひろがつてゐる。夕霧の深い波に浸されて、平原は一そう廣漠として、さながら、暮れはてた空と融け合つたかのやうに思はれる。私は大股に谿沿ひの道を下りて行つた。すると急にどこからともなく野原の遠くの方から男の子のはつきりした聲が聞こえる。「アントロブカ！」

アントロブカアアア！……と最後の音節を長く長く引つぱりながら、やけに片意地に、泣きさうな聲で叫んでゐた。

子供はしばらく聲をひそめてゐたが、またもや叫び出した。その聲は静まり返つて、軽くまどろんでゐる空氣のなかに、はつきりとひびきわたる。少くとも、三十たびくらゐはアントロブカの名を呼び立てた。やがて不意に、野原の遠い向ふの果から恰も別の世界から來たもののやうに、やつと聞きとれるやうな聲が聞こえて來た。

「なんだああい？」

おきに男の子の聲は、怒つてゐるやうな調子のうちにも嬉しさうに叫んだ、

「こつちさ來うよ、木靈ああ！」

「何しによーお？」しばらく経つてから向ふが答へる。

「何でつて、お父つつあんが斬り殺してやるとよお、」初めの聲は急いで叫び返した。

相手の聲はもうそれに應へなかつた。男の兒は又してもアントロブカを呼びはじめた。その叫びはだんだん間遠に、だんだん微かになりながらも、なほ私の耳に聞こえて來た。そのうちにあたりは眞暗になつて、私は、私の村を取りまいて、コロトフカから四露里のところにある森の縁を廻つた……。

「アントロブカアア！」といふ聲は夜の蔭に充たされた空氣のなかにも、なほ聞こえてゐるやうに思はれた。

ピョートル・ペトローチ・カラターエフ

五年ほど前の秋のこと、モスクワからトゥラへ行く途中で、馬のないために、殆んどまる一日といふもの、餘儀なく宿場で暮らしたことがあつた。獵からの歸り途中で、私はついつつかりして自分の三頭立の馬をすつかり先に歸してしまつたのである。宿場の頭かしらといふのは、もう相當に年のいつた不愛想な男で、髪の毛を鼻の眞上まで振り下げ、睡さうな小さな眼をしてゐたが、私がどんなに泣き言をいつても、頼んでも、ぼつりぼつりと生返事をして、まるで自分の務めを呪つてでもゐるかやうに憤ろしく戸をびしやりと音させた。さうして、上り段のところへ出ながら、馭者たちを叱りつけた。馭者たちは両手に重い頸木を持つて、泥濘ぬかるみの中を呑氣さうにぶらぶらしてゐたり、ベンチに腰をかけては、欠伸をしたり、體を引つ掻いたりしてゐたが、親分の嘔鳴りうなりなどは、どこを風が吹くかといつたやうに、別に氣にもとめなかつた。私はもう三度ほどもお茶を入れて貰ひ、幾度か眠らうとしたが駄目であつた。窓や壁に書き散らされてゐる樂書がくしよをすつかり讀んでしまつた。私は實に退屈して困つた。冷やかな、やるせない絶望の念を懷きながら、

私は自分の旅行馬車の仰向いた轅を見つめてゐた。すると不意に鈴の音が聞こえて来て、疲れきつた三頭の馬に曳かせた小さな馬車が上り段の前に停まつた。新來の客は馬車から跳び下りざま、「馬を、大急ぎで！」と叫びながら、部屋の中へ入つて来た。馬はゐないと頭が答へるのを、彼はよく見受けるやうな妙な驚き顔をして聴いてゐた。その間に私は退屈してゐる人間がもつ倦むところを知らない好奇心を以て、この新しい仲間の足の先から頭の先まで忽ちにして瞥見してしまつた。彼は見かけは三十そこそこであつた。味も素つ氣もない黄ばんだ顔には、見るも厭な銅いろの反射を見せて、消す由もない痘痕が残つてゐる。青味がかつた黒く長い髪の毛は後ろに渦を巻いて、襟のうへにかかり、前の方は顛顛のところをすさまじく撚られてゐる。小さな腫れぼつたい眼はぼんやりと、ただ開いてゐるに過ぎない。上唇のうへには薄い髭が見える。彼は馬市などへやつて来る身持の悪い地主みたいに、色まだらな、ひどく脂じみた短い上着を着て、薄むらさきの色あせた絹のネクタイ、銅の釦のついたチョッキに、ひどく大きな膝革のある灰色のスポンを穿いて、その下からは磨かない長靴の先が微かに覗いてゐる。煙草と火酒の匂ひを、きつく匂はせて、上着の袖に殆んどかくれた赤く太い指には銀の指環や、トッラ出來の指環を見せてゐる。こんな恰好の男は露西亞には何十人といはず、百を以て數へるほどたくさんゐる。正直にいふと、かういふ連中とは、知合ひになつても、何ひとつ面白いことはないのである。とこ

ろが、新來の客を見たときは、かういふ獨り決めをしてゐたのであつたが、私は彼の顔にあどけない、人の好い、情熱的な表情を、どうしても見逃すことができなかつた。

「まあ、皆さんがここで一時間の餘も待つてゐるでございます。」と私を指しながら、頭がいつた。

一時間の餘だつて！ 悪黨め、人を馬鹿にしやがる。

「尤も、先様には、そんなに入り用でもないんだらう。」と新來の客が答へた。

「それあ、どうでございますんすか分かりませんが。」と無愛想に頭がいふ。

「ぢやあ、どうしても駄目なんだね？ たつた一匹の馬もゐないつていふんだね？」

「さやうでございます。一匹もゐないんでして。」

「うん、そんなら、サモワールを持つて來さしてくれ。しばらく待つとしよう。どうにもしやうがない。」

新しい客はベンチに腰をおろして、卓子のうへに帽子を投げつけ、髪の毛を撫でた。

「あの、もう貴方はお茶をおあがりになりましたか？」

「ええ。」

「でも、もう一つ、おつきあひにいかがですか？」

私は承知した。どつしりした人參いろのサモワールは、これで四度目に卓子のうへに現はれた。私はラム酒の瓶を取り出した。私がこの茶呑み友だちをあまり裕かでない貴族だと見て取つたのは、間違ひではなかつた。彼の名はピョートル・ペトロキッチ・カラターエフといつた。

私たちは談し合つた。まだやつて来てから半時間とも経たないうちに、彼は心の底まで打明けて、その身の上を聞かせるのであつた。

「私はいま、モスクワへ行くとおぼろなんですが、」四杯目の杯を飲み乾しながらいつた、「もう田舎では二進も三進も行かなくなりましてね。」

「それはまたどうして？」

「なあに、どうしてといふこともないんですが、うまく行かないんですよ。家政の調子がすつかり狂つて、百姓たちを破産させましてね、正直の話。凶年つづきで、やれ不作の、何のかんのと、いろんな、あんな、不幸が……。それにしても、」と彼は力なく眼をそらして附け加へた、「まあ何ていふ御主人様でせうねえ、私は！」

「どうしてまた、そんなことを？」

「しかし、いや、」と彼は私を遮つた、「あんな家政があるもんですか！ まあ、いいですか、」と首をかしげて、一心に煙草を喫みながらつづける、「まあ、私を御覽になつたら、その……と

お思ひになるでせうね……。ところが、正直のところ私は大した教育も受けて居りません。資力もなかつたもんですから。や、御免なさい、私は何でも明けすけに言つてしまふ方でして。それで要するに……」

彼はその言葉をいひきらずに、手を振つた。私は向ふが勘ちがひをしてゐるといふことや、私は貴方に逢へて非常に嬉しいなどといふことを熱心にいつて、それから領地を管理するには、そんなに充分な教養は要らない氣がするといつてやつた。

「御同感です。」と彼は答へた、「私も御同感です。しかし、やつぱり特別にさういふものを持ち合はしてゐる必要がありますね。世の中にはよく仕事を辨へて、それでうまく行く人がある！ ところが、私と來たら……。ちよつと失禮ですが、貴方は彼得堡からおいでになりましたか、それともモスクワから？」

「ペテルブルグから來ました。」

彼は鼻の孔から、煙を長く、ゆらゆらと吹いた。

「私は役に就かうと思つてモスクワへ行くとおぼろなです。」

「どちらへ御就職なさるおつもりですか？」

「それあ分からんです。まあ、行きあたりばつたりですね。白狀しますと、私はお役所勤めが

怖いんでして。直ぐに責任問題と来るんですからね。田舎にばかり住んでみて、御承知のやうに田舎には馴れてますが、……しかし、今は二進も三進も行かない、……貧困で！……ああ、もう、火の車で！」

「そのかはり首都へ行けば、うまくやつて行かせよう。」

「首都で……さあ、首都へ行つて、どんないいことがあるか分かりませんが。まあ、やつて見ませう。案外、いいかも知れません。」

「ぢやあ、もうお里でお暮らしになることはできないんですか？」

彼は溜息をついた。

「駄目なんです。今ではもう、里は殆んど私のものではないんでして。」

「それはまた、どうして？」

「なあに、氣立てのいい人があましてね、隣りの人なんです。この人が新規に手をかけることになりました……。賣渡しの手形まで済みました……。」

可哀さうに、ピョートル・ベトロキッチは顔に手をあてて、ちよつと考へてゐたが、やがて頭を振つた。

「さあ、もうかうなつては仕方ありません！……が、實を申しますと、」彼は暫く黙つて

ゐた後で、附け足した、「誰を責めることもない、自分が悪いんだ。空威張りが好きだった！」

……もつてのほかですが、空威張りが好きで！」

「あなたは田舎で面白くお暮らしますか？」と私は訊ねた。

「貴方、私んところには、」彼は私の顔をまともに見ながら、力を入れて答へる、「獵犬が十二番もゐましてね、それは、あなた、やたらにゐない奴でしたよ。（彼は最後の言葉を引つ張つてい）つた。野兎が見つかる、きつと振り廻される。狐や狼や貂なんか狙つたら、蛇、まるで毒蛇みたいでしたよ。それからまた、自慢になるボルゾイ種の犬ももつてましたつけ。けれど今となつては昔のことです。嘘をいつたつて始まらない。私も鐵砲かついで、獵もしました、『コンテスカ夫人』といふ犬をもつてましたが、そいつはすばらしいセッターで、鼻がよく利いて何でもつかまへました。まあ、沼地なんかへ近づいて『さかせ』つていひますね。ところが、あいつが探さないとすると、十四の犬をつれて行つて、いくら力んだつて、何一つ見つかりませんでしたよ。それが、いざ探すとすると、全く死物ぐるひになる！それで、家の中では、とてもお行儀がいいんです。左の手で麵麩をやつて、『猶太人が食つた』といふと、取らんぢやありませんか。それが右の手でやつて、『お嬢さまが召しあがつた』といふと、直ぐに取つて平らげるんです。あれの産んだ仔がゐましたが、これがまた素敵な犬で、私はモスクワへ連れて行かうと思つたん

ですが、友人から鐵砲と一しよに所望されましたね。『モスクワへ行つたら、君、そんなどころやあるまい。向ふへ行つたら、まるつきり、君、ちがつて來るんだぜ。』と、かう言ふんでして。それで、もう仔犬もやれば、鐵砲もやつてしまひました。ですから、そんなものはみんなあちらに残つてゐるわけなんです。」

「しかし、モスクワへ行つたつて獵はできる筈です。」

「いやもう、何の足しになるもんですか？ 自分の身を支へることさへもできなかつた。だから今は我慢もしくちやなりませんよ。それはさうと、くはしくお伺ひしたいもんですが、モスクワで暮らすのはどうでせう、金がかかりませうか？」

「いや、それほどでもありません。」

「それほどでもない？ ……それから何でござんすが、モスクワにはジブシーがゐるでせうか？」

「ジブシーつて、どんな？」

「つまり、何ですわ、あの、市なんかを廻つてる？」

「ええ、ゐますとも、そんならモスクワにも……」

「さうですか、それは結構だ。私はジブシーが好きで、いや、馬鹿な！ でも、好きでしてね

……」

ピョートル・ベトロキッチの眼は前後を忘れて楽しさうに輝いた。しかし、ふつとベンチのうへに身を反らして、それから深い考へに沈んで、首を垂れ、私の方へ空のゴップを差し出した。

「あなたのラム酒を頂戴したいんですが。」と彼はいつた。

「しかし茶はもうすつかり出ちやいましたよ。」

「結構です、茶なんかなくつたつて……ああ！」

カラタリエフは兩手に頭をかかへて、卓子のうへに臂をもたせかけた。私は黙々として彼を見つめ、酔つた人がよく、あたり構はずに洩らす感傷的な歎息や、殊によつたらあの手合が惜し気もなく流す涙でも見せられることと思つてゐたのに、さて頭をあげたのを見ると、その顔には深い悲しみの色があらはれてゐて、實をいふと、私はすつかり驚かされてしまつた。

「どうかしましたか？」

「いいえ、別に……ちよつと昔のことを思ひ出したものですから。なあに、ちよつとした話でございまして……。お話いたしませうか、尤も御迷惑になつては濟みませんから……」

「とんでもないことです！」

「さうですか、」と彼は溜息まじりに続ける、「ずるぶるいろんなことがあるものでして……ま

あ、早い話が、私なんかにしても。およろしかつたらお話しませう。尤も、わかりませんけど……」

「是非きかしていただきませう、ピョートル・ペトロキッチ。」

「おやあ、さうませう、大したことぢやないけど……やあ、何ですな、」彼は始める、「しかし、實際、わかりませんが……」

「や、もう、そんなことはおつしやらずに、ピョートル・ペトロキッチ。」

「まあ、そんなら、結構です。實は私に、いはば、一寸したはずみで起きたことなんです。私は田舎に暮らして居りました……。突然、私は一人の娘が氣に入りましたね。ああ、全くあの娘といつたら、……器量よしで、利口で、それにまた、それは氣立ての善い女でした！ 名はマトリョーナと申しまして。しかし當り前の娘でしてね。つまりその、おわかりでせうね、農奴でして、全くのはいた女だつたんですよ。それも宅の娘ぢやなくて、よそので、……だから、それが災難だつたんです。さあ、そんな譯で私はその娘を可愛がりましてね。まあ、そんな、實際、ちよつとした話でして、それで向ふも私を悪くは思ひませんでした。さうかうするうちに、マトリョーナは自分のからだを女主人のところから受け出してくれと言ひ出したんです。實は私も左様なことを考へないでもなかつた……。ところが、あれの主といふのは金持で、怖ろしい狸婆でした。」

私んところから十五露里ほどんとこに住んでましたんですが。さあ、それで、或る、いはゆる、天氣晴朗の日に、私は三頭立の馬車を支度させました、——軸馬には、うちの駿馬で、亞細亞産の飛切りのいい、名前をラムブルドスといふのを充てましてね、——自分はまた一張羅を着込んで、マトリョーナの奥方のところへ出向きました。行つて見ると、家は傍屋もあり、庭園もある大きな家でした……。マトリョーナは道の曲り角へ出て私を待つてゐて、何か私と話をしようとしてゐたんですが、やうやく手に接吻しただけで、わきの方へ行つてしまつたんです。さて、玄關へ行つて『御主人は御在宅ですか？』と訊きました。……すると、とても背の高い従僕が出て来て、『どなた様でいらつしやいますか？』といふんです。そこで『かう取次いでくれ、君、地主のカタターエフといふ者が、ちよつと御相談があつて參つたとね、』私はさういひました。従僕が奥へ行つてしまつた。あとで私はひとり待ちながら考へる、『はて、どうなるかしら？ きつとあの業突婆、途方もない値段を吹つかけるだらう、金持のくせに。ひよつとしたら五百ルーブリくらゐ出せといふだらう。』ところへやうやく従僕が歸つて来て、『どうぞお通り下さい。』といふ。そこで私はその後について客間へ入りました。客間には、ちつぽけな、黄ばんだ色の婆さんが安樂椅子に腰をかけて、眼をばちくりさしてゐる。『なに御用で？』先づ切り出しには、『初めてお目にかかりまして、誠に嬉しう存じます、』てなやうなことをいふのが至當だらうと思つてゐました。

……。すると『あなたは間違つてらつしやる、妾はこの主ぢやございませぬ、主の身内のもの
 一で……。なに御用で?』といふんです。私はそこで、御主人様と御相談したいことがあるんだと
 一言申しました。『マリヤ・イリーニチナは今日はお目にかかれませぬ。加減が悪くて……。な
 に御用で?』これは仕様がなないと、腹の中で思ひましたので、すつかり私は仔細を明かしました。
 婆さんは耳を立てて聴いてましたが、『マトリョーナつて?』どのマトリョーナで?』『クリイク
 の娘、マトリョーナ・フォードロワです?』『フォードル・クリイクの娘……。けれど、どうして
 御存じで?』『ふとしたことで。』『それで、貴方のお志はあれに分かつてるんですか?』『ええ。』
 婆さんは黙つてしまひましたが、やがて、『けど、私はあの不屈者を……。』つていふんです。
 いや、私は、正直のところ、驚きましたよ。『何だつて又そんなことを、とんでもない! ……
 私は相當のお金で引取らうと思つてるんです、是非、まあ、お決めただいて。』すると老いぼ
 れ婆め、ぐづく言ひやがる、『まあ、驚いたことを工夫なさる。貴方のお金をあたしが要るつ
 て! ……いや、もうあいつを酷い目にあはしてやる、酷い目に……。性根を入れてやる。』婆め、
 意地わるく、ほざきまはる、『ここが不足なのか、え? ……ああ、あれは鬼だ、神さま、お救し
 下さい、こんなことを申して!』私は、ほんとに、かつとなつた。『何だつて、貴女はあんな哀
 れな娘を感しつけるんです?』何であの子が、その、罪があるんです?』婆さんは十字を切りま

してね。『ああ、いまましい、私が使つてるものを……。』『だつて、あれは貴女のものぢやな
 いでせう!』『さあ、それはもうマリヤ・イリーニチナが承知してありますよ、あんな。あんなの
 知つたことぢやない。けれど、誰のお抱へだか、ようく後でマトリョーナの阿魔に教へてやりま
 す。』白状しますが、この悪たれ婆に私はもう少して飛びかかるところでした。しかし、マトリョ
 ーナのことに思ひ至ると、上げた手が自づと下がりました。そのとき、ぎくりとしたことといつ
 たら、とても今お話できません。それで私は婆さんに哀願し始めたのです。『お金はいくらでも
 さし上げますから』と。『けれど、貴方にあるが何の役に立つんです?』『小母さん、あれに私
 は参つたんですよ、まあ、私の身にもなつて見て下さい……。まあ、貴女のお手に接吻させて下
 さい。』そこで、私は鬼婆の手に接吻をしたんです! 『それでは、』と狸婆め、ぶつぶつ言ふ
 んです。『妾はマリヤ・イリーニチナに言つときませう。何て言ひますか、まづ二日ばかりし
 てまた来て下さい。』私は非常な不安をいだいて歸つて来ました。あんなことをして却つて事を
 打ち壊しにしたらうとか、事情を打明けたつて無駄だつたらうとか、臆測しかかつたんですが、
 気がついた時はもう遅かつたんです。二日ほど経つて、私は奥方のところへ出かけて行きました。
 今度は居間へ通されました。花はぎつしりあるし、飾りつけは立派だし、御自分は精巧な安樂椅
 子に腰をおろして、うしろのクッションに頭をもたせてゐました。例の身内の人も腰かけてるし、

それに草いろの着物を着た、髪の毛の白つぽい、口のまがつた、多分、お相手の女でせうが、生娘なまごみたいのが居りました。婆さんは鼻にかかつた聲で、『どうぞおかけ下さい。』といひました。私は腰をかけました。それから私が年はいくつだとか、やれ、どこに勤めてゐた、やれ、どうするつもりだとか、高尚な言葉で勿體ぶつて訊くんです。私は巨細に應答しました。婆さんは卓子のうへからハンカチを取つて、ひらひら振つて、煽あほぎながら……『承りましたよ、あなた様のお志は、カチエリーナ・カルボヅナから承りましたよ、』と、かう申します。『けれど、奉公人には暇をやらないといふ家法を決めて居りますので。さういふことは不都合なことでもあり、ちゃんとした家にはあるまじきことです。ちゃんとしたことではないのですからね。もう、私は然るべく處理しておきました。』かういふ言ひ草です、『もうあなた様にもこのうへ厄介をかけずに済むでせうよ、』とかうなんです、『決して』つて。『どういたしまして、厄介どころぢやありません……けれど、マトリョーナ・フォードロヅナはそんなに御入用なんでせうか?』すると『いえ、』つて、『ちつとも入用ぢやありません。』『そんならどうして私に譲つて下さらないんですか?』『どうも氣が進まないもんですからね。氣が進まない、ただそれだけのことです。それにもう、わたしは處理しましたし、あれは曠野スチボの村へ遣られる筈です。』私は、がーんと打ちのめされました。婆さんは佛蘭西語で草いろの着物を着た娘さんに二言ことばかりいひました。その娘さ

んは出て行つた。『私は』とまた言ふんです、『厳格な規則をもつた女で、それにまた身體からだも弱いしするので、厄介なことには我慢がなりませんのです。あなた様は未だ若くていらつしやるし、私はもう年寄ですから、御忠告を申す権利があるわけですね。如何です、身をおきめになつて、御結婚を、いい配偶者つれあひをお探しなすつては。持參金のふんだんにある花嫁たんごはさう澤山あるもんぢやないけど、貧しくつても、身持のいい娘はずるぶんありますよ。』私はね、この婆さんを見つめたきりで、先方がどんなことを喋つてゐるのだから分からなかつた。ただ結婚の話をしてゐるのだとは思ひましたが、私の耳には絶えず、『曠野スチボの村』といふ言葉が鳴り響いてゐるんです。お嫁を貰へつて! 何をいつてやがるんだ! ……』

ここまで話して来て、彼は不意に話をやめて、私をじつと見た。

「ええ。」

「はあ、むろん、わかつてまさあね。で、私は聞き棄てならなかつたんです。『まあ、冗談ぢやない、小母さん、何てつまらんことを仰つしやるんです? 結婚がどうしたと言ふんです?』私はただお宅の女中のマトリョーナを譲つて下さるかどうか、伺ひたいんです?』婆さんは歎息なげきしましてね、『ああ、人さわがせな! ああ、歸らしておくれ! ああ……』身内の者がそばへ

駈けつけて、私を罵る。婆さんの方は相變らず、唸つてゐる、『何だつて私はこんな目に逢ふんだらう? ……して見ると、妾はもうこの家の主人ぢやないのかしら? ああ、ああ!』私は帽子を引つ摺むと、まるで氣違ひみたいにおもてへ駈け出しました。

「恐らく、」と彼はまた言葉を繼いで、「あなたは私がこんな身分の低い娘に夢中になるなんて、手のつけられない奴だと思ひになるでせうね。私は自分を、その何ですな、正當なりと言ひ切るつもりはありません。……もうかういふ風になつたのですからね! ……嘘のやうな話ですが、晝となく夜となく、一寸も落ちついてゐられなかつた、……苦しむばかり! そのうへ、『私はあの不仕合はせな娘を臺なしにしたんだ!』と思つて。と同時に、時にはあの娘が仕事着をきて家鴨を追ひまはしてゐたり、主人の吩咐ついでで虐待されてるところや、樹脂を塗つた長靴を穿いた名主や百姓が散々ひどいことを毒づいてゐるところを思ひ出すと、——冷汗が流れてくるのでした。さて、どうしても我慢ができない、私はあの娘のやられた村を探索して、馬に乗つて、その村さして出かけたのです。翌る日の日の暮れ頃には、もうそこへ着きました。まさか私がこんな仕打ちに出ようとは思はなかつたものと見えて、向ふでは私のことについては、何とも指圖して置かなかつたのです。そこで私はまるで隣りの者でもあるやうな風をして、まつすぐに名主のところへ行きました。屋敷へ入つて、あたりを見まはすと、マトリョーナが上り段のところ

腰かけて、頼杖をついてゐるんです。彼女はあぶなく聲を出すところでしたが、私は威しつけて、裏の畑の方を指しました。それから小舎の中へ入つて、名主とちよつとお喋りをして、嘘八百をならべ立て、潮時を見はからつて、マトリョーナのところへ出て行きました。彼女は可哀さうに、私の頸に吊りさがつた。あの可愛いのが、色は蒼ざめ、瘦せてゐて。私がかういひました、『苦にすることはない、マトリョーナ、大丈夫だよ、泣くんぢやない。』とは言つて見たものの、言つてる私の眼からも涙が止め度なく出て来るのです……。さあ、しかし、しまひには流石に私もきまりが悪くなつて来て、あの娘にいひました、『マトリョーナ、もう泣いたつて始まらん。それでかういふことになるんだ。いはゆる、斷然と、事をしなくぢやならん。おまへは俺と一しよに逃げるんだよ。それがつまり爲すべき事だ。』マトリョーナはもう氣絶しさうになつて、……『どうしてそんなことが! それこそ私の身の破滅です、私はきつと苛め殺されるでせう、みんなに!』『馬鹿な! 誰がお前を見つけるものか?』『見つかります、きつと見つかります。ありがたう、ビョートル・ペトロキッチ、あなたの御親切は決して忘れませんわ。けど、今はもう堪忍して下さいな。かうなるのも、全く、私の運勢なんですから。』『ええい、マトリョーナ、マトリョーナ、おれはおまへのことを、氣概のある女だと思つてたのになあ!』いや、たしかに、なかなか氣概がありましたよ、……情があつて、勿體ないほどの情があつて! 『何だつてま

た、ここに残つてなきやならないんだ！ どつちにしたつて同じことだ、これより悪くなりつこないんだ。さあ、お言ひ、お前は名主らの拳固を食はされたのかい、え？』マトリョーナはむつとして、唇をふるはしました。『たつて私のために家族の暮らしが立たなくなるんですもの。』『それぢや、お前の家族の人が……追つ拂はれるつていふのかい、え？』『ええ、兄さんは間違ひなく。』『ぢやお父さんは？』『さあ、お父さんはやられないでせう。お父さんは、こちらのたつた一人の好い仕立屋なんです、ほんとに。』『そう、御覽よ、兄さんだつて、こんなことで、まさか消えて失くなりもすまいし。』私が娘を説き伏せるのにどんなに骨を折つたと思ひます。何しろ、この責任を負つて下さいといふやうなことで持ち出すんですからね……『なあに、そんなことはもう、おまへの出る幕ぢやないんだ』つて言つてやりました……。それにしても私はたうとう彼女を連れ出しました、……その時ぢやなく、別の時に。夜、馬車に乗つて行つて、連れ出したんです。』

「連れ出したんですか？」

「さうです……さあ、それで、彼女は私んどこへ根付きましたね。私んところは小さくつて、使つてる者も少い。それに宅の連中は、はつきり申し上げますと、私を尊敬してゐましたから、どんなに餌があつたからつて、私を裏切るやうなことはしなかつたのです。私は實に幸福な日を

送ることになりました。マトリョーナの奴も一息ついて、元どほりになりました。そこで私はもうあの娘に現をぬかしちやつて……まあ何ていふ良い娘でしたらう！ 全く何でも出来る！ 歌も歌へれば、踊も出来る、ギターも弾けるし……。近所の人には見せなかつた。よけいなお喋りをされるのが心配でした。たつた一人、友達で、極々懇意にしてゐるパンテレイ・ゴルノスをさるのが心配してね！ 御存じありませんかしら？ それが、あの娘のこととなると、全ターエフといふのがありました。まるで奥方か何ぞのやうに、あれの手に接吻をするんです、ほんとく、有頂天になりましたね。まるで奥方か何ぞのやうに、あれの手に接吻をするんです、ほんとに。實のところ、ゴルノスターエフは私なんかとちがつて、教育のある男で、プーシキンなどはすつかり讀んでゐました。時をり、マトリョーナや私を相手に話をしましたが、こちらはいつも聞き耳を立てるほどでした。彼女に手習ひも仕込んでくれました。まあ、それほどの奇人です！ それからあれにどんな着物をさせたかと申しますと、全く、縣知事夫人以上でしたよ。毛皮の縁をとつた緋の天鵝絨の裏毛皮の外套をこさへてやりましてね、……いや、その外套がよく映るといつたら！ その外套はモスクワのマダムが新式に腰締めをつけて仕立てたんでしてね。いや、そのマトリョーナと來たら、何て不思議な女でせう！ 時によると、考へ込んで、何時間も坐つて、床を見つめたきり、眉毛ひとつ動かさない。私もまた坐つて、あれを視てゐる。けれども、初めて會つたやうな工合で、どうもいくら視てゐても見飽きるといふことがない……。さうする

と、あれは、つこりする。もう、私の胸は誰かにくすぐられてでもあるかのやうに、わくわくするんです。さうかと思ふと、だしぬけに笑ひ出して、冗談をいつたり、踊り出したり、眼のまはるほど熱く、烈しく私を抱きしめることもある。朝から晩まで、私はどうしたらあれを喜ばすことができるかと、そればかり考へてゐたものです。嘘のやうな話ですが、私はただ、可愛いあの娘がどんなに喜ぶか、喜んで、すつかり顔を赧くしたり、私のやつた物を身につけたり、新しいものを身につけて、いそいそとやつて来ては接吻をしたり、そんなところが見たいばかりに、いろんな物を遣つたんです。どこをどうして親爺のクリイクが嗅ぎつけたのか分かりませんが、爺さんが様子を見に來ましたつけ。そして、どんなに泣いたこととせう……。こんな風で、二人は五箇月ばかり暮らしました、そしていつまでも、いつまでも私はあれと一緒に暮らせた筈だったのに、運が悪いつたらありやしない！」

ピョートル・ペトロキツチは話をやめた。

「一たい、どんなことが起こつたんです？」

と、私は同情して訊ねた。

彼は手を振つた。

「何もかもいけなくなつたんです。私はあの娘の身を誤らしてしまつた。あのマトリョーナの

奴は轎に乗つて驅けまはるのが好きで好きでたまらないんです。それもどうかすると、自分で手綱をとるんでしてね。外套をひつかけて、刺繡をしたトルジョーク出来の手袋をはめて、きやきやと噪やくのでした。いつも私たちは、夜に限つて乗りまはしたんです。といふのも、御承知のやうに、人目を避けるためでしてね。さて、あるとき、日を選びましてね。つまり、すばらしく好い天氣の日です。とても寒い日で、空は澄みわたり、風もない……。二人は乗り出しました。マトリョーナが手綱をとりましてね。ふと行く先を見るとどうでせう？ ククエフカ、自分の奥様の村へ向つてゐるぢやありませんか？ たしかにククエフカだ。私は『これ、氣でも狂つたのか、どこへ行くんだ？』といひました、あれは肩越しに私をちらりと振りかへつて、にっこりした。そして、『景氣よくさして頂戴よ。』つていふんです。『ああ！』と私は考へました、『なあに、どうなとなれ！……』主人の家の前を走らしてやるのも面白いぢやありませんか？ ねえ、あなた、面白いぢやありませんか？ そこでどんどん走らせました。軸馬はまるで遊びで行くやう。側馬は、あなた、つむじ風のやうな勢ひです。行くほどに、早くもククエフカの教會が見える。このとき、ふと見ると、向ふの方から草いろの古めかしい箱馬車かのろのろとやつてくる。うしろの馬丁臺には從僕の姿が見える……。女主人が、まぎれもない女主人がやつて来る！ 私は怖ぢ氣がついてしまつた。しかし、マトリョーナは馬に手綱を食らはして、箱馬

車めがけて飛ばすことといつたら！ 向ふの馭者はね、こつちが矢のやうに走つて行くのを見てるんです。アルキメレスの奴、片側へ避けようとしたんですね。それで手綱をぐいと急に引つばつたもんですから、箱馬車は雪だまりに眞逆様。窓硝子はこはれる、女主人は「ああ、ああ、ああ、ああ！ ああ、ああ、ああ、ああつ！」と叫ぶし、附添ひの女は「停めて！ 停めて」と金切り聲を出すし、ところが、こつちは一目散に駆けぬける。二人は走つてゆく。しかし私は考へました、「こいつはとんだことになるわい。ククエフカなんぞへ来させなけりやよかつた」と。それからどうなつたと思ひます？ いふまでもなく奥様がマトリョーナを見とめたんです、私のことも。それで、年寄が私を訴へたぢやありませんか、「宅から逃げた女中がカラターエフの所に居ります」といつて、早速、例によつて金をつかませてね。さあ、事です。郡の警察署長がやつて来る。これはかねて知合ひのステパン・セルゲーキッチ・クゾフキンといふいい男です。いや、腹の底はいい男ぢやありませんけど。さて、やつて来まして、「左様、なるほど、ところで、ピョートル・ペトローキッチ、一體、どういふわけなんです？ ……責任は重大ですよ。ちやんと、これに對しては、法律に明文があるんですからね。」と申します。私はかういひました、「まあ、この話は勿論しなくちやならんが、まづ、遠方を来たんだから何か一口やりませんかね？」一口やることには賛成したんですが、「司法権が要求するんですからね、ピョートル・ペトロー

キッチ、よく御自分で考へて見て下さい。」と、かういふんです。だから、私は「司法権、むろんさうだ、その通りだ……、ところで僕は君が鴉毛の馬を有つてゐることを聞いたんだが、僕のラムブルドスと取り換へる氣はありませんか？ ……ところでマトリョーナ・フォードロワつて娘は僕んとこにや居りませんがね。」つていひました。すると、「なにを、ピョートル・ペトローキッチ、娘はゐる筈だ。ここは瑞西とは譯が違ふ……、そりあ、僕の小马とラムブルドスと取り換へてもいいがね、何なら貰つてつてもいいがね。」つて言ひましてね。それにしても、その時はどうやら追つ拂ひましたよ。ところが、奥方はいよいよ躍起になつて、一萬ルーブリかかつても惜しくないつていふんです。實は、初めて私に會つたとき、あの人は急に緑いろの着物を着てた話相手の女の子を私に娶はせようと思ひついたんです。それは後から分かつたことなんです。だからこそこんなに怒つちやつたんです。かういふ奥様がたに限つて、とんでもないことを工夫するもんだ！ ……退屈まぎれでせうね、きつと。さて、私は惨めなことになつちやつた。それでも金目も惜みず、マトリョーナをかくまひましてね、——いやはや！ みんなには困らされ、すつかり絞られて。借財は出来る。からだは悪くなる……。それで或る晩、私は床の中に横になつて考へてみました、「ああ、何の因果で、こんな目も忍んでゐるのか？ あれのことを思ひ切れないとあれば、一體どうしたらいいんだらう？ ……どうしても思ひ切れない、こ

ればつかりは！』とところへ、ふいとマトリヨーナが入つて來ました。私はその頃は、家から二露里ばかりの自分の農園へ隠しておいたのです。私はびつくりしました。『どうした？ あそこにも見つかったのか？』『いいえ、ピョートル・ペトロキッチ、ブブノフでは誰ひとり邪魔をする人なんかありません。けど、いつまで、かうして居られませう？ ねえ、あなた、』かういひましてね、『あたし、からだも悪くなるし、ねえ、ピョートル・ペトロキッチ、あたし、貴方がお氣の毒なの、ねえ、あなた。あなたの御親切は一生わすれませんが、ピョートル・ペトロキッチ、けど、今日はお別れに参りましたの。』『何、何だつて、馬鹿な？ 別れるつて、どうして別れる？ どうして？』『でもやつぱり……あたし、あちらへ行つて、あちらの人になります。』『しかし、俺は屋根裏にでも緊いどいて見せる、氣ちがひ奴、……俺を臺なしにするつもりか？ 殺さうといふのか？ え？』娘は黙つて、床のうへを見つめてゐました。『さあ、何とかいつてくれ！』『あたし、このうへ貴方に迷惑をかけたかありませんの、ピョートル・ペトロキッチ、』さあ、もう何といつたつて、駄目なことは分かり切つてゐる……『だが分かりさうなものだ、馬鹿が……、分からないのかい、氣でも……氣でも違つたのかい……』

ここでピョートル・ペトロキッチは聲をあげて烈しく泣き出した。

「それから、どうなつたと思ひます？」と彼は話を進める、拳で卓子をたたき、肩をしかめよ」と努めながら。けれど、涙はなほ彼の熱い頬を傳つて流れてゐた。「娘は身を渡してしまつた。わざわざ行つて、あちらの者になつてしまつたぢやありませんか……」

「馬の用意が出来ましてございます！」と頭が部屋へ入りながら眞面目くさつて叫んだ。

私たちは二人とも立ちあがつた。

「一體、マトリヨーナはどうなりました？」と私は訊いた。

カラターエフはただ手を振つた。

*

カラターエフに逢つてから一年して、偶々私はモスクワへ行つた。あるとき、午餐まへに私は鳥屋町の向ふにあるカフェーへ行つた。ここはモスクワの風變りなカフェーである。玉突部屋には、煙草の煙の渦巻く中に、眞つ赤になつた顔や髭や、髪の毛、時代おくれの短い上着、最新流行のスラヴ型の上着などが、ちらちら見える。瘡せた小柄な老人たちは質素なフロックを着て露西亞の新聞を讀んでゐる。給仕がお盆をもつて、緑いろの絨氈をやはらかに踏みながら、せつせと歩いてゐるのが、ちらほら見える。商人たちは、ひどく抜け目のなささうな顔をしてお茶を飲んでゐる。ところへ、いきなり玉突部屋から、いくらか髪が亂れて、足許のかなりに覺東ない男

が出て来た。両手をポケットに入れ、頭をぐらつかせ、彼はあてどもなくそこらを見まはした。
 「まあ！ まあ！ まあ！ ピョートル・ペトローキッチ！……御機嫌はいかがですか？」
 ピョートル・ペトローキッチは殆んど私の頭に飛びつかんばかりにして、幾分ふらふらしながら、小さな別室へ私を引つばつて行つた。

「さあ、こちらへ、」と氣を配つて私を安樂椅子にかけさせながらいつた、「こちらが宜しうございませう。給仕、麥酒だよ！ いや、三鞭酒だ！ さあ、全く、思ひがけませんでしたよ。ほんとに思ひがけませんでした。……こちらへ大分まへに？ これからずつと長くおいでですか？ いづれにしても、いはゆる神様のお引合せですね、それこそ……」

「さうです。覚えてらして……」
 「なんで忘れるもんですか、忘れませんか」と彼はせはしく私を遮つた、「あれも昔のこと……昔のこと……」

「して、あなたはこちらで何をなさつてますか、ピョートル・ペトローキッチ？」

「御覽の通りの生活で。まあ、ここで暮らすのが何よりです。ここへ來てる連中は親切でしてね。私もここへ來て氣が安まりましたよ。」

彼は溜息をついて天井を仰いだ。

「お勤めですか？」

「いいえ、まだ勤めては居りません。近いうちに就職するつもりではあります。しかし、勤めなんか、つまらないでせう？ ……世間の人を相手——それが何よりですよ。私はここで、とても

面白い連中と知合ひになりましたよ！ ……」

少年が三鞭酒の壺を黒いお盆に載せて持つて來た。

「さう、さう、この子もなかなかいい人間ですよ、……なあ、ワーシヤ、お前はほんとにいい人間だらう？ お前の健康を祝して乾杯だ！」

少年はちよつと立ち止まつて、お行儀よく頭を振り、微笑みを浮かべて出て行つた。

「さやう、この土地には善い人がかなりいますよ、」ピョートル・ペトローキッチは言葉をつづける、「情味のある、眞ごころのある……。よろしかつたら御紹介しませうか？ それは實に氣持のいい連中ですよ……。みんなあなたとお知合ひになるのを喜ぶでせう。それはさうと、……ボブプロフは死にましたよ、ほんとに可哀さうなことをしました。」

「ボブプロフつて、だれ？」

「セルゲイ・ボブプロフです。見上げた男でした。野育ちの何もわからない私をよく面倒見てくれました。それからパンテレイ・ゴルノスタエフも死にました。みんな死んぢまつたんだ、みんな

な！」

「貴方はずつとモスクワにお暮らしでしたか？ 村へはお出になりませんでしたか？」

「村へ？ ……私の村は賣られちゃいましたよ。」

「賣られましたつて？」

「え、競賣で……さうだ、貴方がお買ひ下さりや宜かつたに！」

「ぢや、これから何で食べて行かれるんですか、ピョートル・ペトロキッチ？」

「萬ざら、干ぼしにもなりませんよ。大丈夫！ 金はなくつても友達がゐませう。金が何だ？ 芥だ！ 黄金は——芥だ」

彼は半ば眼を閉ぢて、ポケットの中を手探りして、掌のうへに十五カペイカの銀貨二枚と十カペイカの銀貨一枚を載せて、私の方へ差し出した。

「これが何です？ 芥ぢやありませんか？ (錢は床のうへに吹つ飛んだ。) いや、それより

か、いかがです、貴方はポレジャーエフをお讀みになりましたか？」

「え、讀みました。」

「モチャーフのハムレットを御覽になりましたか？」

「いいえ、見ませんでした。」

「御覽にならない、あれを御覽にならない……(カラターエフの顔は蒼ざめ、眼は不安げに、きよろきよろ動いた。彼はわきを向いてしまった。その唇のうへを微かな慄へが通り過ぎた。)

ああ、モチャーフ、モチャーフ！ 『この世を終ふは——眠りなり』
と彼はぼんやりした聲でいつた。

眠りに過ぎず！ この眠り

悲しみや生くる者の負ふべき幾百の苦しみ

除くと知らば……それこそ願うてもなき

大終焉ぢやが……死は……眠り……

「眠りなり、眠りなり！」と彼は幾たびか口の中で繰り返した。

「ちよつとお伺ひしますが、」と私はいひかかつてゐた。しかし、彼は熱心になほつづけた。

* 誰が世の鞭撻や嘲笑ひ、

法の無力や虐主の壓制、

驕れる者の凌辱や顧みられぬ戀の歎き、
賤しき者が功を賤しむるに耐ふべきか……
ただ一いきに安らひを得るは
何時の日ぞ……ああ、そなたが聖い祈りに
わが罪の消滅をも祈り添へてたもれ……

それから卓子のうへに頭をくつたりと垂れた。彼は口ごもつて、譯のわからないことをいひ出してゐた。

「ひと月すぎて！」と更に新たな力を加へていつた。

*
疾く行き過ぐる短きひと月！

涙に暮れてわが父の哀しき骸むくろに

侍りたまひし、その履くつさへも古びぬに！

ああ！ 辨へもなく物いはぬ獣だとても

今しばらくは歎かうものを……

彼は三鞭酒の杯を口もとへ持つて行つた。が、飲み乾さずに、なほもつづけけた。

*
へキューバゆゑに？

へキューバは何者？ 又あれはへキューバにとつて何者ぢや？

あれがあひの女ひの身の上をなぜ泣くのぢや？ ……

然るに俺は……いやしむべき、小心の奴隷——

卑怯者！ 俺を悪漢と呼ぶのは誰ぢや？

嘘つきだと言ふのは誰ぢや？

俺はその凌辱をも忍ぶであらう……さうぢや！

俺は意氣地のない人間……俺には腹立つ意地もない、

俺には凌辱も苦しくないわい……

カラターエフは盃をおとして、頭をかかへた。私は彼の氣持が分かつたやうな氣がした。
「まあ、仕様ががない」と彼はつひにかういつた、「過ぎたるは及ばざるが如し、……ね、さう」

ぢやありませんか？

(といつて彼は笑ひ出した。) さあ、あなたの御健康を祝して！」

「あなたはつとモスクワにいらつしやいますか？」と私は訊いた。

「モスクワの土になるつもりです。」

「カラターエフ！」といふ聲が隣りの部屋から聞こえる、「カラターエフ、どこにゐるんだい？ さあ、来いよ、なあ、おい。」

「呼んでますから、」と大儀さうに椅子から立ちあがりながらいふ、「失禮します。お都合がつかましたら、遊びにいらして下さい。私は***に居りますから。」

しかし、翌る日には、思ひがけない事情のために私はモスクワを去らねばならなかつた。その後は、もう二度とピョートル・ペトロローキッチ・カラターエフに逢はなかつた。

註

七 支配人 地主の持つ大きな村の一切を管理する者で、多くは割に稼ぎの多かつた農奴の中から選ばれる。

八 『永遠の猶太人』 基督が磔刑に處せられるあへ、これに凌辱を加へたために、その後は惨めな流浪をつづける猶太人の物語。この宿命を擔つた猶太人の物語はさまざまに語りつがれ、近代に至つてはゲエテの挿事詩、レーナウの詩、シュレーゲルの二部劇、ユージエヌ・スヌーの長篇などが有名である。ここではスヌー(一八〇四―五七)の社會小説「永遠の猶太人」(それはドストイェフスキイに甚影響を與へたと傳へられる)を指したものと推定される。

一四 カレム 佛蘭西の代表的な料理人(一七八四―一八三三)。後に優れた料理人の代名詞となつた。

一六 夏小舎 暖爐のない部屋。

三七 吸取砂 細かな砂をインクの乾かないとき、紙の上に撒いて吸ひとらせる。普通は胡椒瓶のやうなものに入れて用ひる。一ブード(二六・三八頁、四頁三六八頁)といへば、かなり大きいことを示す。

四二 ボルホフ麵麩 ボルホフはオリョール縣の一地方。ボルホフ麵麩はその名産の環形の麵麩。

四八 ブード八ループリ 一ブード(前掲)につき八ループリの意。

五〇 鼠札、白札 商人風情は紙幣の額をいふのにその色彩を稱へる。鼠札は五十ループリ。白札は二十五ループリの紙幣。

五六 アデライード色 薄青色。

- 五六 金花菜 その葉は香氣があるので、それを煙草代りに鼻につめて香ひを嗅ぐ。
- 五九 女性の語尾 a アレクサンドルといふのは男性、アレクサンドラ (a 語尾) といふのは女性である。
- 六一 獨逸人 當時の露西亞においては管理人として多くは獨逸人が雇はれてゐた。
- 七四 木片 木片を燃やしてランプの代用にする。
- 七五 狼 (ビリューク) 「オリョール縣では寄邊なく暮らして、氣むづかしい人をかう呼んでゐる。」(作者の註)
- 八七 プーシキンが書いたサデイの言葉 「嘗てサデイのいへりし如く、或るものはすでに世になく、或るものは遠く離れて……プーシキンの「オネーギン」第八章第五十一節の句。この言葉をプーシキンは抒情詩「バフチサライの泉」にも用ひてゐる。サデイは波斯の詩人(一一八四—一二九一)。
- 九〇 貴族團長 エカテリナ女皇朝以來、貴族は彼等を代表し貴族の孤兒の財産を管理する團長を選舉する權利をもつてゐた。
- 一〇一 生粹の露西亞人は 生粹の露西亞人、わけでも舊式の人々は先づ茶碗のお茶を下の皿にあげて、これを徐ろに喫む習はしがあつた。
- 一〇五 ライ麥の麵麩 實際はあまりうまくないのだが、愛國者たちはうまいといふ。
- 一一三 O をそのままに 標準語では力點の前にある O は A のやうに發音される。これを文字通りに發音するのはモスクワの北や東の田舎の人、或は舊弊の人たちである。従つて大體が古めかしく、朴訥に聞こえる。
- 一二四 鹽や酒精 「鹽や酒精を食べさせると馬はちぎに肥る」(作者の註)
- 一三二 ヴイオッテイ イタリアのヴァイオリニスト(一七五三—一八二四)。

- 一三三 アムチエンスク 「民衆の間ではムツエンスクはアムチエンスクと呼ばれてゐる。そこの若者は敏捷である。」(作者の註)
- 一四一 ワーニヤ、サーシヤ ワーニヤはイワンの、サーシヤはアレクサンドルの愛稱。
- 一四八 ポレジャーエフ 年若くして世を去つた露西亞詩人。學生時代にすぐれた詩を書いたが、年少の身をもつて敢へて專制政治の邪惡を諷し、自由への憧憬を書いたためにニコライ一世の忌諱にふれ、つひに悲劇的な生涯を送らなければならなかつた。彼の詩は屠ーレルモントフの詩に比較された(一八〇六—一三八)。
- 一五二 ヨハンナ・シヨーベンハウエル 有名な哲學者の母。その作品はロマンチックなものが多い(一七六六—一八三八)。
- 一五四 一八四〇年の 「一八四〇年にはひどい寒さに見舞はれながらも、十二月の末まで少しの雪も降らなかつたので、青いものは何もかも凍つて枯れてしまひ、多くの美しい裸の森もこの無慈悲な冬に滅び去つた。もはや取りかへしはむづかしく、土地の生産力も目に見えて衰へてゐる。『禁制林』(聖體行列の通り過ぎたところ) なども、昔のやうな神神しい木立の影はなく、今は白樺や泥濘が勝手に伸びてゐる。それ以外に、わが國では植林の方法を知らぬのである。」(作者の註)
- 一五四 コリツォフ 露西亞の有名な國民詩人(一八〇八—一四二)。
- 一六九 麻屑織 ^{フハハラ}モスクワやカザンにゐた糧穀系の露西亞人が麻や亞麻の屑の三等品を織つて作つてゐた特殊の織物で、彼等はこれをもつて露西亞中を行商して歩いた。
- 一七三 十字架 露終に際して、十字架に接吻させるのである。

一七九 バチクリ しきりに脚きする男につけた綽名。

一八〇 拔作 ぼんやり者につけた綽名。

一八一 イツソブ 露西亞語では「イツソブ」といふ言葉に「わからずや」といふ意味もあるが、ここではバチクリがイツソブの何たるかを知らずに、單なる輕蔑の意味をもつて言つてゐるのである。

一九一 盛り土 雪をよけ寒さを防ぐために家のまはりに盛る土。

一九一 ハーキュリーズ 希臘神話にあらはれた力の神。

一九三 獨逸人 獨逸人は最も典雅な音樂に馴れてゐる國民であると當時の露西亞人は考へてゐた。

一九七 山男 「ボルホフ郡とジーズドラ郡の境から南にかけて長くつづいてゐる森林帯の住民のこと。彼等は特殊な生活様式をもち、言語や風習も異つてゐる。言葉のあとへ「ハ」は「あ」と附ける。」(作者の註)

一九七 木偶の坊 「彼等が鈍重で疑ひ深い性質をもつてゐるところから、から呼ばれる。」(作者の註)

二〇七 宿場 驛邊馬車の驛。同時に馬車を待つ旅行者のために一種の旅人宿ともなつてゐた。

二〇八 トウラ モスクワから凡そ五十里の南方にあつて金屬工業に名のある所。小銃、サモワール、鐵器その他の工藝品を今もなほ多量に産する。指環や耳環はその名産品のうちに數へられる。

二一三 十二番 ^{つがひ} 一つがひは二頭である。これは必ずしも牝と牡、一頭づつとは限らない。獵犬は二頭づつ繋がれて獵に連れて行かれる。

二一五 茶 口直しにお茶を喫む。

二二七 トルジョーク トギル縣の町。レースや刺繍に有名な所。

二二八 アルキメレス アルキメデスの説。出まかせにいつた言葉で、單に「憎いあん畜生め」くらゐの意に用ひられてゐる。

二三四 ポレジャーエフ 前掲。

二三四 モチャイロフ 當時の露西亞の名醫。悲劇浪漫劇を演じ、殊にその「ハムレット」は有名で、ベリンスキイの賞讃してやまなかつたところ(一八〇〇—四八)。

二三五 眠りに過ぎず! 「ハムレット」第三幕第一場に出づ。

二三五 誰が世の 同上。

二三六 疾く行き過ぎる 「ハムレット」第一幕第二場に出づ。

二三七 ヘキューバゆゑに 同上。

11349

昭和十四年八月三日第一刷發行
昭和二十三年二月二十五日第三刷發行

嶽人日記 中

定價四拾貳圓



譯者 中山省三郎

編集者 布川角左衛門

行者 東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地 岩波雄二郎

印刷者 東京都西多摩郡龜村根ケ布三八五番地 山田一雄

發行所

東京都千代田區
神田一ツ橋三ノ三

岩

波

書

店

會員番號A一〇九〇〇四號

株式會社大化堂印刷・製本

年 月 日 26 35

開
23 10.4
1

昭和廿三年
六月十日

日本銀行

開

23 10.4

16

終

